

まほろば宮下社長のルーツ案内記

福島復興から日本の立て直し探訪

会津 後援 へ 近 紅

その 7



旅の案内人：神奈川県在住

大橋 しのぶ





前回までのあらすじ

二〇一五年五月、まほろばの宮下社長と母方の先祖が同じ福島県・会津若松である事が分かり、ルーツ探しのお手伝いをする事になりました。七月、福島県二本松市で講演会をするという奥様の日程に合わせて福島入りをし、ご夫妻に会津若松をご案内致しました。その後ご一緒に福島県の海岸通りの現状を見てまわりました。

主従の絆

二本松市での奥様の講演会の翌日、私達は再び山道を会津方面へと戻り、会津の初代藩主である保科正之公ほしなまさゆきが祀られている土津神社を参拝しました。

保科正之公は正保五年（一六四八年）以来、二三年間、甥にあたる將軍・家綱を助け江戸で幕政を取り仕切り、その間一步も会津へ帰る事はありませんでした。その為に宮下社長の一族の一人である大儒学者の横田俊益しゅんえきは、何度も江戸に登り、その都度数か月滞在して正之公の侍講を務めたのは前号でも述べたとおりです。

正之公は会津の藩政を国家老の田中正玄たなかまさはると江戸屋敷詰めともまつじの友松氏ともまつじ興に任せて、自らは幕府の運営にあたられました。その善政は殉職の禁止令や玉川上水の開削など多数に及びます。しかし正之公は家綱公を立て、亡くなる前に自らの功績の証となるような書類を全て焼き払わせたといわれています。正之公は晩年に失明をしてし

まいますが、一説には江戸城での激務をこなすため、小用を足す時間をも惜しみ、あまり水分を取らないようにしていた為に眼病（白内障？）を患ったとも言われています。一六六二年には咯血して隠居を願いますが家綱公は側を離れる事を許されませんでした。しかし一六六九年四月二十七日、公が五十九歳の時、ようやく隠居許可の命が下り、正之公は髪を短くして道服を着られました。

寛文十年（一六七〇年）四月一二日、六十歳になった正之はついに將軍の許可を得て、病氣療養の為に会津に帰還できる事になり江戸を出発します。実に二十三年ぶりの故郷です。そして懐かしい会津国境の高原峠に差し掛かった時に、無限の感慨を込めて次の一首を述べました。

六十歳になるもの

目しひて故郷に帰る。

見ねばこそ

さぞや景色の変わるらめ

六十（むそ）になりて

帰るふるさと

※意味 眼が見えなくなってしまうけれども、さぞかし景色は変わっているであろう。六十才になつて帰つて来た我が故郷は。

保科正之公はこの二年後の寛文一二年二月一八日に江戸屋敷で御逝去されますが、その年の八月に自らの墓所を猪苗代湖畔の会津磐梯山の南麓にあたる見瀬山みせやまと定められ、その地を視察されます。そしてそ

の際、五月に亡くなつたばかりの腹心の会津家老・田中正玄の墓に立ち寄りました。



保科正之公の墓所

田中家老は温和で有能な名家老で保科公が留守の会津藩を預かり善政を施しました。寛文一二年五月二八日（一六七二年六月二三日）に逝去すると領民は大いに嘆き悲しみ、正之公も

「正玄は我に仕うつこと四六年、

いまだ一日も私意を以って公事を議した事はなかった。あなげ天は彼を私に先立たせてしまったのか。」と、大変その死を嘆き悲しみました。そして田中正玄は猪苗代湖を見渡せるこの見瀬山の一角に墓所を賜ったのでした。

正之公はその田中正玄の墓前まで来ると、「正玄ここにあるか。我も近く参るぞ」と親しく語りかけ、其の者たちは皆涙を流し、顔を上げる事ができなかったと伝わっています。その言葉どおり保科正之公はその年の十二月に冥府へと旅立ったのでした。

保科正之公は死後、土津神社の御祭神としてこの見瀬山に祀られますが、田中家老の墓所はその土津神社より二百メートルほど東南方の下にあります。田中家老は信彦霊社と贈り名をされ、その後土津神社内に御末社として奉祀されました。

こうして今も保科正之公と田中家老は主従一体となって会津と福島に行く末を見守って下さっているのです。



ちなみにその田中正玄のご子孫である磯深雪さんが、偶然にも以前からまほろばのお客様だったので、きつと田中家老も宮下ご夫妻の墓参を喜ばれた事でしょう。

ホーリーバジル

土津神社の参拝後は猪苗代湖畔にあるホテルリステル猪苗代に立ち寄りました。

この日はちょうど、ホテルのハーブ園で福島在住のホーリーバジル協会の友人知人達がハーブティの試飲会を開催していたのです。

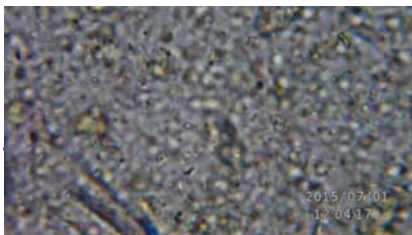
ホーリーバジルとはインド原産のシソ科のハーブです。特徴的な良い香りがして様々な癒し効果があり、アールヴエーダでは「不

老不死の薬」と言われています。

ホーリーバジルが発するオゾンには、有害物質を中和し、空気を浄化する働きがあるといい、一説には放射能も中和させられる力があるとの事です。

科学的な実証はまだまだこれからでしょうが、ホーリーバジルには微生物が多く生息していることから、その微生物たちの発酵作用が放射性物質を無害化する働きがあるのではないかと期待されています。

それをさて置いても、素晴らしい香りと、目にも優しい鮮やかな緑の葉と美しい花を咲かせるホーリーバジルは健康やガーデニングに興味がある方にお勧めしたい一押しハーブです。葉っぱを数枚とってカップに入れお湯を注ぐだけで簡単にとて



ホーリーバジルの葉に生息する微生物群



も美味しいフレッシュハーブティーが楽しめます。

※ホーリーバジルにご興味のある方は、二〇一三年六月に福島県福島市飯坂町に発足されたNPO法人日本ホーリーバジル協会のホームページをご覧くださいませ。



エリクサーと放射能

さて、不老長寿や放射性物質の無害化と言えば、やはりまほろばの誇る浄活水器エリクサーが思い出されます。

皆様もご存知のとおり、宮下社長が0-1テストで独自に開発されたこの浄活水器エリクサーは七百種類もの植物や鉱物を原材料にして焼いた特殊セラミックと四十六種類もの濾過材が内蔵された最高級の浄活水器です。

単に水を浄化するだけでなく様々な機能と波動をも高める力があると言われています。そしてこの水は表面張力が、世界の長寿水として有名なフンザの水よりも低く強い浸透力があるのです。つまりエリクサーで浄化活性された水は、世界の名水に匹敵するか、それ以上の健康長寿が期待できるかもしれないのです。

エリクサーの意味は錬金術の世界で「不老不死の霊薬・万能薬」を表していて、まさにこの浄活水



器に相応しい名前だと思われるます。そしてその性能は国内はおろか世界の専門家をも唸らせた奇跡の逸品なのです。

二〇一一年三月、東日本大震災により引き起こされた福島第一原発の事故では多くの放射性物質が日本国土にまき散らされた事は記憶に新しいと思います。この時に、まほろばでも何かできる事はないかと様々に模索されたそうです。

また全国のお客様からはエリクサーには放射性物質を除去する働きがあるのかどうかとの問い合わせが殺到しました。しかし、もともと放射性物質の検査ができる機関が少ない上に、国や被災地の検査が優先となる事情や、まほろばが希望する厳しい国際基準での検査を引き受けてくれる機関が見つからなかった事などから、エリクサーの放射性物質除去能力の検査

は困難を極めました。

しかし関西でエリクサーを取り扱っている(株)オルネの嘉納氏が、被災地のボランティア活動で懇意になった飯館村の宮司さんの綿津見神社で野地の水を手入して水質検査を実施して下さる事になりました。

その結果、エリクサーで浄化した水からはヨウ素やセシウムが検出されない事が分かりました。また逆流洗浄したエリクサー内部からも放射性物質は検出されなかったのです。

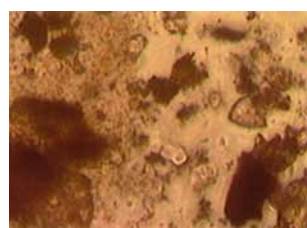
※詳細は、まほろばエリクサープロジエクト『エリクサーで放射性物質がとれますか?』をご覧くださいませ。



エリクサーで浄化された飯館村の野地の水・左。(右が浄水前)



デビッド・シュバイツァー博士が撮影したエリクサー水。まるで銀河宇宙のようです。



浄活水器エリクサーのセラミック内に生息する有用微生物群。ホーリーバジルに生息する微生物群とよく似ています。

以下は個人的な感想ですが、エリクサーの内部には発酵をうながす微生物が多く存在しているようなので、その微生物の働きが放射能の無害化に何か影響を与えているのではないかと推測しています。

様々な話題

会津・猪苗代後は高速道路を通り、六十キロ程離れた中通りの須賀川市へと向かいました。広い福島県内を移動の車中では、初めて

ゆつくり宮下ご夫妻と色々なお話しができました。

その中でもちよつと驚いたのは、宮下社長のお母様と私の父が同じく膵臓癌で、若くして亡くなっていた事でした。膵臓癌は多々ある癌の中でも、身体の深部にある臓器の為に発見が困難で治療も難しく、現在でも生存率の最も低い癌の一つです。父は私が二十一歳の時に五十一歳の若さで他界しましたが、宮下社長のお母様は更にお若く、宮下さんが十四歳の時に四十三歳の若さで亡くなったとの事でした。

私の母も幼少期から体が弱く、私がお母様のごろ付いた時から定期的に病んでは寝込んでいました。その都度、幼い私は心臓が押しつぶされるように不安になりました。やがてそれは無意識のうちに、人が心身共に健康でいるにはどうしたら良いのだろうかという問いかけに変わっていったような気がします。また父はとても健康でめったに風邪もひかない人だったので、家族はみんな先に逝くのは母

だろうと思っていました。そんな父が膵臓癌になり、手術のいかにもなく半年であつたという間に他界してしまつたため、私のその問いかけは更に深くなっていました。

宮下社長も幼くして最愛の母親を亡くしてしまつた事が、その後の人生に大きな影響を与えたようです。十八歳で単身東京へ出て、毎日早朝から水垢離を取り、牛乳配達をしながら生計を立てて古琴の勉強をして、やがて大数学者である岡潔先生から情緒の心を学び、その後も薬師寺で修行をしたり、託宣の職を志したり…。断片的にお聞きしただけでも、かなり波乱万丈で非凡な、求道者としての人生を歩んで来られたのだなと感じました。

また話は宮下社長の父方のルーツである宮下家や奥様のご実家である竹内家の事にも及びました。

そして宮下家は、あの『宮下文書』で有名な宮下家であることや、竹内家もあの『竹内文書』で有名な竹内家

に繋がっているらしいとお聞きして更にびっくりしました。

『宮下文書』も『竹内文書』も共に古史古伝と言われる分野の文書です。古史古伝には他にも『九鬼（くかみ）文書』、『上記（うえつふみ）』、『秀真伝（ほつまつたえ）』、『東日流外三郡誌（つがるそとさんぐんし）』と言つた物が存在しています。

そこには日本の正史とされる『古事記』や『日本書紀』には載っていない太古の記述や荒唐無稽な内容も多く記載されているため、現代の学会では認められていない文書類でもあります。もちろんどの書もそのまま内容を鵜呑みにする訳にはいきませんが、古史古伝と言われるものの中には正史だけでは説明のつかなかった語



まほろば地下の「無限心」庵にある、宮下文書と竹内文書

源や話の流れが解明できる物や、単に後世の創作であると言いきれない内容が垣間見れる箇所も多々あります。

歴史書というも

のはその時代の権力者に都合の良いように作られていくのは古今東西の常識であり、当時の事情として、ばらばらだつた人民を一つにまとめていく為に必要な面もあった事と思います。

『古事記』や『日本書紀』も先人達が苦勞して編集作成して下さつた世界に誇れる歴史書として、私も愛情を持って大切にしたいと思っています。ただ時にはその時代の弱者や敗者にも思いを馳せ、消されて埋もれてしまつた歴史に光を当てるためにも、正史を大切にすると同じくらいに各地に伝わる伝説や口伝、古史古伝を大切に伝承し、研究を続けていく事が必要なのではないでしょうか。

そんな宮下家のご先祖様は南朝の歴史にも関わりがあつたかもしれないと聞いて、その日三回目のビックリがやってきました。

一説によると宮下家の先祖の宮下（三浦）義家と忠君愛国ので有名な楠木正成と、『神皇正統記』の筆者である北畠親房が、宮下

社長のルーツである富士吉田の明見村を本宮地として、近くにある鎌倉幕府の倒幕計画を立て、南朝を守ろうとしていたそうです。そんな説も露知らぬまま、若き日の宮下社長は忠君愛国の楠木正成に惹かれ、ある方から正成公が息子の正行に与えた遺書を授かったりしたご縁もあり、楠木正成が御祭神で墓所もある、神戸の湊川神社に毎月詣でていたそうなのです。

「そうなんですか！宮下家は南朝の歴史にもご縁があるかもしれないですね。実は私もここ数年、偶然に行く神社仏閣が南朝にご縁がある場所なので気になっていたので。去年は福島県の伊達市にある霊山神社を訪れたら、そこが北畠親子を御祭神とする神社だったので、びっくりしたのです。まさか福島に南朝にご縁のある場所があるとは思わなかったので一首作ってしまったくらいです。」

「福島の霊山旅し驚いた
こんなところに南朝の夏
つて（笑）。」

しかも帰宅したら会津会を通じて、北畠家の子孫という人が連絡をしてきたので、更に驚いてしまつて。私は南朝北朝の歴史は殆ど手をつけた事がないので、来年はちよつと勉強してみようかと思ひます。」と私。

「それだったら『神皇正統記』も読んでみたらいいのじゃないかしら。北畠親房さんが書いたものだから。」と奥様。

「そのような文献もあるのですね。ありがとうございます。」

「それにしても、どうして霊山神社に行ったの？」と宮下社長。

「実は寺田本家の山荘である、一味学舎が霊山の近くにあるのです。原発事故の影響で放射線量が高くなつてしまったので、夏になると敷地にホーリーバジルを植えに行っているんです。

本当に気休め程度なんです、少しでも線量が下がってくると良いなと思ひまして。」

「あらそんな場所があるなら行って見てみたいわ。ここからどれくらいかかるの？」と奥様。



寺田雅代夫人（左）と日本ホーリーバジル協会の、故・大矢泰司理事長（右）と協会理事の鳴原裕子さん（左から二番目）とご一緒にホーリーバジルを初植え（2014年）、宮城と福島の県境にある一味学舎にて。

「福島と宮城の県境の山奥なので、ここから行くと二時間くらいはかかると思います。でもいくつか機会があつたら、見に行つて下さい。宮下ご夫妻が訪れたらきっと亡き寺田啓佐社長も喜ばれると思います。」

そんなこんなな四方山話をして、いる内に車はついに今回の旅の最終目的地である須賀川の横川良雄さん宅に辿り着きました。

福島県人の微笑み

横川良雄さんは、まほろばさん一軒の為に一五年にも渡り有機米を丹精込めて耕作してくれていた

農家さんです。しかしご存知、東日本大震災の原発事故により福島の農産物には風評被害の嵐が吹き荒れました。県内では絶望のあまり自死した有機農家もあるそうです。

初めてお会いした横川ご夫妻は、そんな過酷な福島の現状を感じさせない程、明るく朗らかに私達一行を迎えて下さいました。前回ご紹介した南相馬の根本さん、そして現在福島市内に住む親戚や友人達もそうですが、福島県人は本当に辛抱強いというか、起こつてしまった現状を受け入れる力を半端なく持っていると感じていました。そして、それは私の父もそうでした。



父は八人兄弟の末っ子として昭和十九年福島市に生を受けました。父が二歳の時に魚屋を営んでいた祖父が病気で亡くなってしまった為、祖母は女手一つで魚の行商をしながら八人兄弟を育て上げたとすです。父は福島商業高校を卒業すると十八歳で単身上京し、

今では大手のある化粧品会社に就職しました。そしてすぐ北海道に配属され、十代の父は営業で道内をくまなく歩き回ったそうです。「一番北では網走まで行ったんだよ。」と聞かされた事があります。

その後も転勤族として全国を回り、名古屋営業所に勤務していた時に母と知り合い、結婚して私が生まれました。

父は故郷を遠く離れても決して福島を忘れる事はなく、故郷の里山である信夫山（しのぶやま）から私の名前をしのぶと名付けました。

信夫山は福島の語源の一つと言われています。その昔、木村吉清という蒲生氏郷配下の武将がこの地を与えられた時、信夫山が霧に

覆われた盆地に島のようにぽっかり浮かんでいるように見え、そこに吾妻おろしの風がよく吹き付けていた事から、風が吹く島（吹島）とし、その後「吹」を縁起のいい「福」に変え「福島」と命名したと言われています。

そんなご縁で私は福島に住んだ事はなかったのですが、幼い時から福島に特別な繋がりを感じて育ってきました。母方のルーツも同じく福島県の会津若松と知ってからは尚更でした。

父は五十一歳で膵臓癌になり手術をして亡くなるまでの間、ついにただの一度も愚痴や泣き言を家族に漏らす事はありませんでした。口の重い人だったので、あまり沢山会話した記憶はないのですが、福島県人らしい不器用なほど真面目でコツコツと働くその姿と、はにかむような静かな微笑みは今でもずっと心に残っています。

前号でもご紹介した人気漫画『美味しんぼ（福島の真実②）百十一巻』でもそんな福島県



人の気質が書かれた箇所が何か所もあります。

「だって、笑うしかないんですもん。泣いたってしょうがないから、笑うしかないでしょう」と、原発近くの町、富岡町町役場の職員さん。

「最初はありやあ、と思ったけれど、文句を言ったらきりがない。飯館に帰っても田んぼも畑もできないなら、帰っていいと言われるまでみんなで頑張っていくほうがいいと思います。」と、笑い飛ばす仮設住宅に暮らす八六歳のおばあちゃん。

そして二本松の米農家の方は、こう語ります。

「現地に視察に来た方が言う、福島県人の七不思議のひとつ。穏やかで物言わないとか、訳のわからないこと言われてますね…。」

悲しんでいない訳がない、怒りがこみあげないはずがない、大

切な故郷を破壊され、家族もバラバラにされ、生きがい奪われてしま

ったのだから。それでも起きてしまった事をたんと受け入れる力。不器用で口ではうまく伝えられない時もある。でも静かに微笑みながらひたむきに一步一步も前に進むうとする姿、それが福島県人の姿だと思っています。

福島の奇跡、奇跡の福島

原発事故の後、横川夫妻は米作りを続けていくべきか悩んだそうです。「果たしてこれは人の口に入れても良い物なのだろうか…」と。そして当然まほろばさんでも、様々な意見が飛び交ったそうです。しかし生死の瀬戸際に立つ所縁ある農家を、他人事のように切り捨てられようはずもなく、義援金を募ったり、「東日本大震災支援ネットワーク」を後押しするなど、何とか被災地を支援していく道はないかと模索しました。

そんな折、茨城大学農学部長の中島紀一教授から驚くべき発表がありました。中島教授は震災以降、農村部を限なく歩き回り、データを収集し解析したところ、例外

があるものの「福島（阿武隈地方?）の農産物からは、放射能がほとんど出ない」という驚くべき結果がでたので

それはなぜか、その秘密は「福島の土」

にある事が分かってきました。

福島の阿武隈山地は花崗岩質の土で、そこには雲母などの鉱物が粘土結晶として含まれており、セシウム粒子はその層の隙間に閉じ込めらるそうです。また阿武隈山地の土はもともとカリウムを多く含んでおり、これが植物の根がセシウムを吸収する事を抑制している事が分かってきました。また粘土やそこに含まれる腐植（有機物）はマイナス荷電の性質を持っていて、プラス荷電の放射性セシウム粒子を電氣的に包み込む働きがある事、そして土はガンマ線を見事に遮断する力がある事などが分かってきたそうなのです。

『続・倭詩』の中で宮下社長は更にこう語ります。



「だが、この結論を導いたのは、学者でも誰でもなかった。現地に踏みとどまったじいちゃん・ばあちゃんたちだったのだ。金儲けではない、自給の為、食べるため、生き延びるために、出した答えだった。絶望的な行く末に息子・娘・孫たちが離れた跡地を、ご先祖様に申し訳ないと耕し、種を撒いたお年寄りたちの為す術なき術だった。ひたすら孫子に食べさせたいと。しかし、若夫婦は、貰っても余所で捨てて了っていた。方々のパーキングにはそれらが山と積まれていたという。それでも老人たちは諦めなかった。自ら分析所を訪ね、測定結果の報告を貰って、若者に突き付けたのだ。それは、福島の家里を孫たちに遺したい、お天道様の恵みに預からせたい、との一念からだ。私は、これを、「福島の奇跡」と呼ぶ。



『土の話』（文・小泉武夫、絵・黒田征太郎 2013年、石風社）絵本の中で、フクシマの土が、阿武隈弁で人間文明を告発する。そして、原子力無用論を説き、「土の中の微生物が、放射能を消してくれる」と訴える。

じいちゃん・ばあちゃんたちが起こした「奇跡の福島」なんだ、と。そして、縄文弥生の昔の昔から縷々綿々と耕し、作り続けてきた祖先の魂が憑り依った土が、放射能を抱き懐えようとしたのだ、と。福島は、必ず復興できる。いや、叶わねばならぬ。そんな顛末を、福島県小野町に江戸時代から続く造り酒屋の御曹司でもある発酵学者・小泉武夫先生にお伝えすると、「それは微生物が…」と絶句された。故郷の、その蔵は既に崩れて無かった。」

忠孝両全の道

宮下ご夫妻と福島を回った翌年の五月、私は兵庫県にある楠木正成を祀った湊川神社を訪れる機会がありました。宮下社長が若き日を過ごしたという神戸の町を見る時間はありませんでしたが、宮下社長が毎月のように通ったというその神社は新緑に包まれ清々しい気に満ちていました。勤皇愛国の為に不利な戦局である事を承知で死地に赴いたその生き様は、白虎隊で有名な幕末の会津藩士達の精神とも重なり思わず胸が熱くなりました。翌日は大阪に移動して北畠顕家と父の北畠親房を祀る阿部野神社を参拝しました。まったくの偶然だったのですが、その日が北畠顕家さんのご命日だったので、そこから歩いて一五分程の所にある墓所にも参拝しました。楠木正成さんと並ぶ南朝の忠臣である顕家さんは、後醍醐天皇の命により、当時陸奥国府のあった、あの福島の霊山から畿内まで転戦を重ねやってきて、ついにこの地

で戦死します（石津の戦い）。享年二十一歳でした。楠木正成が湊川の戦いで戦死してちょうど二年後の同じ五月の事でした。



北畠頼家卿肖像（萩生天泉画、
霊山神社蔵）

南北朝の戦いは更に続き、その十年後には楠木正成の嫡男である楠木正行が四條畷の戦い（大阪）で父親の生き様をなぞるがごとくに戦死するのです。そこで七月には正行公が祀られている大阪の四條畷神社に足を運んでみました。四條畷神社は飯盛山の中腹にある眺めの良い神社でした。偶然にも白虎隊の自刃した会津若松の飯盛山と同じ名前です。

正行は父親が戦死した時にはまだ十一歳で、届けられた首を見た時にはショックのあまり自刃しようとしませんが、母親から生きて父

の遺志を引き継ぐように強く諫められ思い止まります。そして南朝方の武將として成長し若くしてこの地で散っていったのでした。

母に自刃を諫められている時の像が境内の左手にありました。台座には「貞仁両全」の字が彫られています。

参道を挟んだ向かい側には正行公と父親の楠正成が桜井の駅で永遠の別れをする場面の像がありました。こちらの台座には「忠孝両全」の文字が彫られています。

楠木正成公は十一歳の我が子正行に「父の死後は足利氏の天下になるだろうがどこまでも正統の天皇を御守りせよ。それが父孝行となるのだ」と諭し、天皇から賜った短刀を与え、身も心も我が子に伝えて出陣されたそうです。案内版にはこうも記れています。

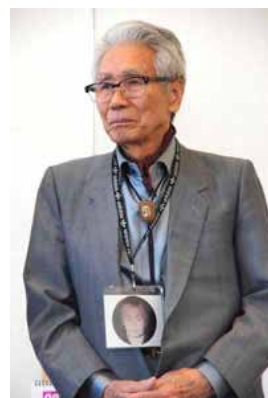


た。『君主への忠義と両親への孝行のどちらも果たすこと』これは君主へ忠義を尽くすことと、両親へ孝行することは全く別のものだが、どちらも両立させる、という意味だそうです。

ちょうどその頃、私は忠と孝について色々と思いを巡らしていた時期でしたので、「そうか、忠と孝は両立できるものなのか、むしろ両全でいくことこそ人の道なのかも知れない。」

と思い、しばし像の前に立ちすくみ、その文字に見入っていました。

実は、私はその前月の6月に家族旅行で北海道に行き、約一年ぶりにまほろばさんもお訪れ、そこで宮下社長と旧知のご友人である、後藤吉助さん（現在は韓国在住）と初めてお目にかかりました。



後藤さんは首から、お母様の顔写真が付いた「母を慕い讃える会」というプレートを下げておられて、最近では自ら作詞作曲した「母ごころ」というCDを発売したばかりとの事でした。

その情熱に驚いてご両親の出身地をお聞きしたところ、何と福島県の信夫（しのぶ）郡だということではないですか。私の父親もその出身でその為に自分はこのように名前を付けられたのです、とお話をさせていただき、お互いにびっくりしました。

後藤吉助さんは一九二六年（大正一五年）父・吉蔵、母ミツとの間に七人兄弟の次男として福島市で生まれました。しかし昭和恐慌で牛乳配達など両親の仕事が切迫し一九三五年（昭和十年）、後藤さんがまだ十歳の時に、家族ぐる

みて今の釧路市阿寒町の舌^{した}辛^{から}村に移住したそうです。なので昭和十九年生まれの私の父と後藤さんは福島市での接点はないはずですが、もしかして父の兄弟や両親とは町ですれ違ったり、後藤さんのお母さまも祖父母の営んでいた魚屋に買い物に来た事があるかもしれないですね。

そんな驚きの初対面の後、後藤さんも一緒に琴似神社や町を散策しました。

案内人の郷土史家である永峰貴さんは琴似に入植した会津藩士の子孫であったので、「そうか、この四人は全員が福島に縁のある人間なのだな」と、不思議な気持ちになりました。



この神社は会津藩の初代藩主である保科正之公も祀られています。目には見えないけれど、きっと正之公や信夫郡にいる神仏やご先祖様達がこういうご縁を紡いでくださっているのだろうなあと、有難く思いながら参拝させていたきました。

まほろばブログに後藤さんの事がこう紹介されています。

「まほろばも、この世の中を良くするには、まず、母を大事にすることが、第一歩だと思っているので、翁の運動には大賛成。」

『人間で一番大切なことは、祖先を敬うこと。それは、母を大切にすること!!!』

是非皆様も、ご賛同くださって、この会を盛り上げましょう。」

子が親を慕うところ、それはまた親が子供を思う心の反転でもあるのでしょ。ずっと昔読んだ本にこんなような事が書いてありました。

「宇宙は慈愛のかたまりであり、人間の事が愛しくて愛しくてならないのだ。だからその愛を何とか

形にしたいくて、親が子供を愛するという形で具現化しているのだ。だから親の愛は宇宙の愛そのものであるのだ」と。

時々親が大嫌いという人にお会いする時もあります。お話を聞いてみると確かにひどい話だったりします。しかしそんな話をする時その人はとても苦しそうで悲しうなのです。そしてそんな時つくづくと思います。

「ああ、親が嫌いで幸せな人はいないのだな、人はどんなにひどい親であっても、嫌って嫌って否定しても、魂の奥底では誰もが親を愛していて、本当は好きになりたくて仕方ないのだな」と。

親の愛は先祖の愛であり、母なる大地である地球の愛、そしてそ



の先にある宇宙の愛に繋がっているならば、人は芯からそれを嫌ったり否定したりする事はできないのでしょうか。例えばひどい親だったとしても、たとえ心身共に病弱だつとしても、たとえ諸般の事情で早死にしまつても、それはあたかも放射能を抱えてくれた土のごとく、家系の悪因縁を親が抱きかかえてくれた姿だと言えるのかもしれません。

もしそうであるのなら、どんな親であつても子が親を慕い讃える事は、実は親と先祖を入り口にしてい、郷土を愛し、国を愛し、この星を愛し、やがて全てを浄化して大宇宙の中心へと帰る慈愛の道と言えるのではないでしょうか。

我が子や孫の為に自ら放射能を抱きかかえようとした福島の人。その土の中で、まるで天の使いのようなふるまいをする不思議な微生物達。自らの寿命を削るようにして国を支え故郷を愛し「土津」の称号で会津磐梯山に鎮まつている保科正之公。

無私無欲の田中家老。そして忠

君愛国の生き様を父子二代で見せてくれた楠木親子と北畠親子達。それら全てが一体となって私の目の前を流れていきました。

「忠と孝」は両輪の車、DNAの二重らせんのように切っても切り離せないもの、「忠孝両全の道」は宇宙へとまっすぐに繋がっていたのです。

四條畷神社の楠木正成・正行親子の像の前で、何か一つの答えをいただけたようでとても嬉しく、像の二人に手を合わせ、再び本殿へと頭を下げました。

福島は宝の山

福島案内へと戻ります。

横川夫妻に有機農業の田畑を見せていただいている最中、私はしばしばご主人に見入ってしまいました。

それは、横川さんが私の亡き父によく似ていたからです。顔つきや話し方や雰囲気も。何だか二三年ぶりに父と再会できたようで嬉しかったです。横川さんにその事



父（村上勝行）享年 51 歳



大橋（左）横川良雄さん（右）

をお話しして、お別れする時には一緒に写真を撮ってもらいました（笑）。

福島の旅の最終日にこんな嬉しいおまけがついて、これもご先祖様のお引き合わせだったのかもれません。後日、手紙を書いて父の写真を同封したところ、本当に似ている！とご夫婦でびっくりされたそうです。

宮下社長が『続・倭詩』の中でおっしゃられたように、この福島の大地は縄文弥生の昔の昔からご先祖様達が縋々綿々と耕し、作り続けてきた大地です。そしてその土には先祖の魂が憑り依っているのです。子孫のために放射能を抱き抱えようとしている先祖の魂が。そんな愛しい大地をどうして見捨てる事ができるでしょうか。

福島は最悪レベルの原発事故の地として、今やチェルノブイリ以上に世界にその名が広まってしまい、父の愛した故郷の信天山は子供達が土遊びもできないほど放射能で汚染されてしまったけれど、それは人知では図り知れない宇宙の慈愛だったと信じたいのです。

前号でも書いたように、いつかこの地でおきた悲劇が教訓となり奇跡へ転じ、人類が忠孝両全の道を歩み全てを浄化し、やがて宇宙の慈愛へと繋がっていったら、この福島の地がまさに福の土地となり宝の山となって輝き始めるのではないのでしょうか。

あの有名な民謡「会津磐梯山」の歌詞のように、笹や稲穂に大地の恵みがいつまでもどこまでも実り続ける黄金の大地として…。

エイヤー会津磐梯山は
宝の山よ 笹に黄金が
エーマタなり下がる♪

『福島は、必ず復興できる。
いや、叶わねばならぬ。』

『続・倭詩』（福島の奇跡 奇跡の福島）より

この言葉を胸に『会津から近江そして倭へ』の福島編を終わらせていただき、次回から近江編へと移りたいと思います。

長々と福島編にお付き合い下さいまして、本当にありがとうございます。

会津嶺の宝の山は福島の
土の心と知る旅路かな

二〇一七年六月十八日

父の日に南会津にて

大橋しのぶ



～熊本地震・南阿蘇村からの続報～

熊本地震で全て破壊されてしまった、会津藩家老の佐川官兵衛の顕彰碑ですが、この4月1日に胸像という形で、南阿蘇村の明神池名水公園のほとりに再建する事ができました。

これも熊本佐川官兵衛顕彰会（興梠二雄会長）や会津若松の顕彰会（菅家一郎会長）の呼びかけに、会員を始め会津武家屋敷（会津若松市）を訪れる観光客が応え、募金額が200万を超えたおかげだそうです。

来年の大河ドラマは「西郷どん」で、西南戦争が最終舞台になると思われます。良かったら西南戦争の舞台の一つである南阿蘇村の明神池も訪れて、国の礎となった先人達に思いを馳せてみてください。



↑福島市 曼荼羅ミュージアム

～福島祈り ホーリーバジル鉢運動～

6月18日、福島市飯坂町にある曼荼羅ミュージアムで、第7回「福島祈り ホーリーバジル鉢運動」が開催されました。

この運動は東日本大震災の半年後の9月、ホーリーバジル協会の故・大矢理事長が原発事故で不安を抱える福島の皆様にはホーリーバジルの種や苗をプレゼントし、「放射能とホーリーバジル」に関する情報を提供した事が発端だそうです。

私も母と一緒に参加させていただき、翌日はホーリーバジルの苗を一味学舎の玄関先に植えてきました。今年は福島県国見町の元町長・佐藤力さんが敷地の草刈や植え付けを手伝ってくださいました。本当にありがとうございました。

※植え付けの仕上げに、持参したエリクサー水を苗にかけてきました！大きく育ちますように。



●著者プロフィール 大橋 しのぶ

寺田本家 23 代目当主故・寺田啓佐さんとの出会いにより、蔵の微生物をテーマにした小説を書き、小冊子を発行することに。ペンネームで発表した小冊子作品は5作になる。2015年、まほろば社長宮下周平と共にルーツ探しの旅の案内人として同行。神奈川県在住。

表紙写真（上側）：磐梯山（中側）：ホーリーバジルとエリクサー浄水器（下側）：横川さんの田圃にて